**様式１**

（表面）

**平成２５年度　東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費　要求書**

部　局　名　： 国際文化学研究科

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **事業名**  **（要求事項）** | **フィールドワークおよび記録・保存のスキルの被災地学生・大学院生に対する移転** | | | | | | | | | | | 継続　・　新規  （どちらかに○して下さい） | | | |
| **代表者** | 所　属　部　局 | | | | | 職 | |  | | | | | | | |
| 国際文化学研究科 | | | | | 教授 | |  | | | | | | | |
| **組　織** | 氏　　名 | | 所属研究機関・部局・職 | | | | | 役　割　分　担 | | | | | | | |
| 梅屋　潔  高倉　浩樹  政岡　伸洋  金菱　清  滝澤　克彦 | | 神戸大学大学院・国際文化学研究科・准教授  東北大学・東北アジア研究センター・准教授  東北学院大学・文学部・教授  東北学院大学・教養学部・准教授  東北大学・文学研究科・専門研究員 | | | | | 代表補佐、現地（宮城を中心とする東北各地）との連携  現地コーディネーター、大学院生等のリクルート・監督  現地コーディネーター、大学院生等のリクルート・監督  現地コーディネーター、大学院生等のリクルート・監督  現地コーディネーター、事務局 | | | | | | | |
| **要求理由（概要・目的）** | | | | | | | | | | | | | | | |
| １．概要：2012年度に引き続き、東北大学等の学生とともに地域住民と協力しつつ共同フィールドワークを行い、フィールドワークの技法の伝授、また阪神淡路大震災からの復興プロセスとそのプロセスの記録方法や技術、淡路における風評被害の克服のプロセス、破壊されたコミュニティの再構築などの知識を伝え、自助的な復興のサポートを行う（以上の内容は昨年度から継続）。2013年度は、2012年度からの成果を東北大学等のコーディネーター、学生と共同して阪神・淡路大震災からの復興の現状視察の巡検をふくむワークショップを兵庫県（北淡町・長田）今後津波による震災被害が予想されている地域（和歌山県・高知県）において開催、阪神淡路・東日本大震災の教訓として発信する。  ２．目的：①昨年度のサポート経費により、フィールドワークを通じて何人かの現地学生にスキルを伝えることができている。スキルの向上、被災状況の復元、復興プロセスの記録ともに、基礎資料蓄積の拡充の要望に応えるために事業を継続し、新たに関与する学生および大学関係者のリクルートを通じて現地の主体的な復興のためのさらなる人材を養成する。②昨年度事業により、阪神淡路大震災の事例について紹介したところ、「未来予想図」を描くためにも、阪神淡路の復興状況を見たいとの要望が強かった。現地からの視察と、関西各地の復興サポーターに本事業を通じて復興状況を伝える目的で、関西各地でのワークショップとシンポジウム開催の実現を果たすことにより、双方向に開かれた共同作業にする。③被災および復興「当事者」としての現地学生の継続的確保とともに「経験者」としての神戸大学側の学生関与の強化。④今後、津波の被害が予想される地域（「未経験者」）からの要望に応え、備えとして何をしておくべきかを構想する契機を提供し、現地からの生の声を伝え、議論する土台を構築し、議論の内容を資料として蓄積する。 | | | | | | | | | | | | | | | |
| **計　画　・　方　法** | | | | | | | | | | | | | | | |
| 昨年度事業の作業は継続・充実させつつ、昨年度事業による集中的な共同調査経験を持つ東北側のメンバーを帯同し、阪神淡路大震災の復興状況のコントラストが顕著にあらわれる北淡、長田、神戸での巡検およびワークショップを実施する。巡検には神戸側も学生を帯同し、前年度とは逆に、兵庫県住民の状況の聞き取りについてのサポートを依頼する。また、和歌山、高知など今後津波被害が予想される地域で今般の被災状況とこれまでの復興状況（昨年度の事業成果）を伝えるシンポジウムを開催する（現地自治体からの要望がある）。神戸大学側、東北側の学生双方に、最終報告書の編集という共同作業を通じ、学生としての基礎的なスキル向上をもはかる。最終報告書はweb上で公開し、収集した資料全体については東北大学等の研究教育機関・地方自治体、地域住民のほか、ワークショップおよびシンポジウム関係地域の住民にも広く自治体を通じて還元を図る。宮城県のデータベース作成事業が実施される場合にはこれと連携し、成果を共有。具体的なタイムテーブルは下記のとおりであり、事業費の用途は神戸大学および宮城側教員の調査出張旅費と宮城、神戸双方の現地調査の学生雇用、およびワークショップとシンポジウム会場費、記録用印刷費である。   |  |  |  |  |  | | --- | --- | --- | --- | --- | | 予備的調査段階（4月～8月）  （学生のリクルートと事前教育、短期のフィールドワークを含む）  会場の予約 | 集中的活動期間  （8月～9月）（集中的活動期間）東北側も神戸に | フィードバック（新しい知見をまとめる） | 補足的調査・活動期間（10月～1月）（方向性の補正期間）シンポジウムで公表しつつ問題を整理 | 報告書編集（1月～3月）（共同作業で報告書を編纂） |   （上記のうち、8月にワークショップ、12月にシンポジウムを予定） | | | | | | | | | | | | | | | |
| **期待される具体的な効果･今後の展開**  （裏面） | | | | | | | | | | | | | | | |
| １． 期待される具体的な効果  期待される具体的な効果は4点に集約される。①復興のプロセスの基礎資料蓄積と被災地への還元：震災被害の現状と復興の過程、そしてコミュニティ再構築のプロセスを、その中に関与しつつ関わりながら記録することで基本的資料の蓄積を現地に還元する。②他地域の事例についての調査の機会提供：阪神・淡路大震災の復興を巡検し、ワークショップで経験当事者の助言を得る回路を開くことで復興にヒントを与えられる。③復興への学生の効果的な関与：上記にともに関わることで、今後復興に関して深い理解と優れたビジョンを備えた学生を養成できる。また、関西圏の学生が当事者意識を回復し、予想される災害への構えを養うことを促す④宮城および神戸の学生による調査研究の継続：活動を通し、学生が被災地を調査するスキルを習得し、調査への意欲をもつことで、共同調査終了後も主体的に調査を継続することを促進する。副次的な効果としては、東北の被災地と阪神淡路震災被災地に加え、災害が予想される高知・和歌山などの地域の人的交流のネットワークを活性化する効果がある。震災からの復興には社会的な関心が薄れた後の継続的なサポートが必要である。神戸以外の関西圏の復興支援グループに今回の活動や成果などを伝え、地域住民ネットワーク間の協力を強化、継続させる効果も期待される。  ２． 今後の展開  本計画に参加した学生がその事業を引き継いで行くことが期待しており、また、これを神戸、東北から高知、和歌山などマルチサイト的な町村レベルの地方自治体や地域住民に移転していくことが望ましい。その第一段階として、東北大学等の学生（および教員）と、神戸側の学生・教員との間に、復興のプロセスの調査・資料蓄積、研究・教育ネットワークを構築し、次の段階に展開しようというものである。被災地の現状は依然として厳しく、コミュニティ、有形・無形の民俗文化などソフト面での被害状況は把握されているとは言い難いのが実情である。今後も実態把握のための調査は緊急の課題であるもの、人的資源が不足している。人材育成の段階的育成とそれらの人材のサポート、さらには他の自然災害等に応用しうるプロセスの検討が次の段階となる。 | | | | | | | | | | | | | | | |
| **経　費** | **使　用　内　訳** | | | | | | | | | | | | | | |
| 合　　計 | | | 旅費・謝金 | | | 事業費 | | | 消耗品費 | | | | その他 | |
| 1,406千円 | | | 1,120千円 | | | 56千円 | | | 0千円 | | | | 230 千円 | |
|  | | |  | | |  | | |  | | | |  | |
| **使　用　内　訳　明　細** | | | | | | | | | | | | | | |
|  | 品　名 | | | 仕　様 | | | | 単　価 | | 数　量 | | 計 | | |
| 旅費・謝金 | 旅費（神戸⇔宮城）  謝金  現地コーディネート  録音書き起こし | | | 3泊4日  1日8時間  1日8時間  1時間 | | | | 90,000円  12,000円  8,000円  13,000円 | | 6  20  10  20 | | **計** | | 540,000円  240,000円  80,000円  260,000円  1,120,000円 |
| 事業費 | 会場費 | | | 神戸大学（鶴甲第1キャンパス）  和歌山ビッグ愛601  高知（高知城ホール大会議室）  （日祭祝13時～17時で試算） | | | | 20,000円  14,000円  22,000円 | | 1  1  1 | | **計** | | 20,000円  14,000円  22,000円  56,000円 |
| 消耗品費 |  | | |  | | | |  | |  | | **計** | | 0円 |
| その他 | 印刷費 | | | シンポジウムポスター、フライヤ  ワークショップ・シンポジウム報告書 | | | | 10,000円  200,000円 | | 3  1 | | **計** | | 30,000円  200,000円  230,000円 |
| **他の事業等での配分状況の有無（現在申請中も含む）　　　　☑有　　・　　□無** | | | | | | | | | | | | | | | |
| （「有」の場合，下記項目に○印を付してください）  ・【国立大学協会】震災復興・日本再生支援事業　　申請中　・採択済  ・その他（　募集機関名：　　　　　　　　　　事業名：　　　　　　　　　　　　　）　　申請中　・採択済 | | | | | | | | | | | | | | | |

**基準額を超える理由**

　　今回基準額である100万円を超えて申請する理由についてご説明いたします。昨年度岡田、梅屋ともに2回ずつ、当初予定通り出張いたしましたが、昨年度実績では、10月を迎える前に、すなわちフィードバックするはずの時期に予算をほぼ使い切っており、補足調査・活動期間、また報告書編集などの時期には、すでに残高がない状態でした。謝金についても見込みが甘かったこともありましょう。昨年度は国立大学協会の震災復興・日本再生支援事業には応募しておりませんでした。

　本年は、昨年度共同していた宮城県文化財保護課および東北大学の事業は、データベース作成事業に事業形態を変えて実施する案で申請がなされるようで、本事業とは連携および情報交換はするものの、相互の人員の乗り入れやこれからの調査資料自体の収集とは一線を画した予算配分になることは必定となっております。いまだ現地の実態はつまびらかになったとは言い難く、本事業の継続的な実施が必要です。

　また、昨年度とは異なり、本事業は本年度計画では、神戸、和歌山および高知におけるワークショップとシンポジウムを実施することで地理的範囲を拡大しており、会場費、シンポジウムの記録、報告書の印刷などで昨年度とは異なった支出が見込まれます。本事業の意義をより広く発信するために、加えたワークショップの実施費用が基準額超過の主たる理由です。

　しかしながら、本事業はいまのところ、無形民俗文化財という、なかなかとらえどころのない被災実態を明確化するものとして、東北各地のプロジェクトと連携しつつ、ユニークかつ注目すべき成果を挙げつつある、といえます。各地からの問い合わせや派遣要請はすでにいくつかあり、とりわけここで挙げた、まだ被災していないが、津波の被害が予想されている地域からのそれは、切実なものと認識しております。また、東北のカウンターパート側からも、じょじょに、「津波がくるまえにこれをやっておけばよかった」などという無形文化財保護のための処方箋についての具体的な声も上がってきており、道は遠いとはいえ、一時期に比べると問題点も整理されつつあります。この成果を被災地の地域社会に還元するだけでなく、被災地の有為な人材に「神戸の経験」を直接伝える機会を設け、また津波での被害が予想される地域（和歌山・高知など）に被災地の生の声と昨年度より蓄積してきた本事業の成果を還元し、「見える化」させることには、重要な社会的責務があると考え、このたびは基準額を超過して申請するものであります。

　今回の予算申請は、全体予算の総額（226万円）の一部、必要最低限の予算を請求しております。本事業と重なる部分もある国立大学協会の震災復興・日本再生事業を受給した場合には、予算配分の調整を行う予定です。加えて、実際のワークショップ、シンポジウム実施においては、本事業の予定予算ではまかなえない部分があり、これについては、関係自治体（北淡町、神戸市、兵庫県、和歌山県文化財課、高知市、高知県文化財課）と協議中です。

また、ワークショップおよびシンポジウムについて東北大学、東北学院大学からのパネリスト旅費については、先方の予算（含科学研究費補助金）にて補う方策も検討しております。　なお、減額が必要な場合はワークショップ、シンポジウムの開催場所を調整することで、対応する事も検討しております。

**様式２**

**平成２５年度　東北大学等との連携による震災復興支援災害科学研究推進活動サポート経費**

**実施報告書**

部局名：　国際文化学研究科

|  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 事　業　名 | **フィールドワークおよび記録・保存のスキルの被災地学生・大学院生に対する移転**  ―震災被害状況の共同フィールドワークと記録・保存作業を通したコミュニティ再構築のサポート― | | | | | | |
| 代　表　者 | 所属部局：国際文化学研究科　　　　　　　職：教授　　　　　　　氏名：岡田浩樹 | | | | | | |
| 事業の実施内容 | 本年度は、東北側の大学関係者と学生を阪神・淡路の被災地に招聘することができ、淡路市の北淡震災記念公園、長田などの巡検を実施した。従来通りの枠組みで宮城県、東北大学と連携しつつ、東松島市および気仙沼市鹿折地区において共同フィールドワークを継続実施した。昨年度実施の分の資料を中心に編集、修正を経て報告書論文にまとめる作業を通じて、参加した被災地の学生たちのスキル向上をはかった。調査資料はコミュティ再構築の資料として、現地に還元し、同時に住民と共に被災実態の指摘と関連機関への提言等を行った点は昨年と同じである。気仙沼市では、当地で震災前から実施されている「市民大学」の一環として本学の阪神・淡路大震災の経験を活かした講演会および仙台でのシンポジウムを開催した。仙台市では招待講演の機会を生かして成果を還元した。梅屋担当部分については気仙沼市教育委員会と気仙沼市文化協会と協力関係のもとに継続事業が進められ、気仙沼文化協会の無形文化財の保存会データベース構築についても次の展望が開かれた。岡田担当の東松島市では、被災者についてのインタビュー資料を現地に還元するとともに、移転後のコミュティ復興のための基礎資料とする作業を継続した。 | | | | | | |
| 事業実施の成果 | 岡田の案内で淡路市などの巡検に同行した大学院学生は、修士論文のテーマに北淡町の事例を取りあげるなど、自身の研究と被災地の現状を考えるうえで深いヒントを得たとする。同行した大学関係者も、情報としては知っていても実際に足を運んでの巡検を通じ、東北の復興の未来予想図を描く一助となったとする。論文の編集・修正・校正作業を通じて、関係した東北側、神戸大学側の学生たちの記録・資料提示のスキルには格段の向上が見られた。被災地の大学の刊行物に掲載されることは大きな意味がある。国際学会、シンポジウム、被災地からの発信を行った。事業協力者も本事業の成果を公刊している。 | | | | | | |
| 今後の計画 | 来年度は、気仙沼市の市民（本年度は大学関係者）を複数阪神・淡路に招聘する試みが企画されている。東北では、今後も、教育委員会共催事業として市内の無形文化財保存会の悉皆調査を実現したい。本経費と連動し、東北大学を含むさまざまなプロジェクトと連携をはかり、東松島町、松島町、石巻市を含む対象地域の拡大は継続して計画検討中である。現地学生の学術的な報告書および論文、学会発表をサポートする。 | | | | | | |
| 配　分　額 | 700 | | 千円 | 支　出　額 | 726.336 | 千円 |  |
| 支出額内訳 | 区　　分 | 員数 | | 単価（円） | 金額（千円） | 備　考 | |
| 東北側関係者招聘旅費宿泊費  岡田教授随行旅費宿泊費  岡田教授東北活動費  梅屋准教授東北活動費  テープおこし  映像アプリケーション | 2 | | 168,920  59,610  176,089  171,660  13,650  6,732 | 168.92  59.61  176.089  171.660  143.325  6.732 | 不足額26.336千円は岡田教授個人研究費にて充当 | |
| 計 |  | |  | 726,336 |  | |
| 本事業に係るご意見・希望等 | 本事業の目的は、第一に被災地の復興支援にあり、その中での神戸大学が貢献するための事業と解釈している。そもそも限られた単独予算では効果的な成果が上げられないのであり、他の事業や他大学・研究機関との連携を評価していただければ幸いです。 | | | | | | |

（備考）活動の成果を別途とりまとめている場合，又は印刷物，ホームページ等にまとめている場合は，作成後，本書と共に１部提出してください。提出期限日は翌年度４月末日です。

別紙

**本経費による活動の成果の代表的なものは以下の通りである。**

１．梅屋潔「気仙沼市における無形民俗文化財の調査記録（Ⅰ）」（相澤卓郎・齋藤良治・土取俊輝との共著）『地域構想学研究教育報告』第4号、東北学院大学教養学部地域構想学科、22-40頁、2013年12月

２．梅屋潔「その年も、「お年とり」は行われた─気仙沼市鹿折地区浪板および小々汐の年越し行事にみる「祈り」」『無形文化が被災するということ―東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社、16-28頁、2014年1月

３．梅屋潔「数百年後の年中行事を占う小径（こみち）」『季刊民族学』148号、46-55頁、2014年4月

４．梅屋潔「震災後の三陸漁村をアフリカニストがあるく」アフリカ・セミナーの会（会長：富永智津子宮城学院女子大学元教授、顧問：山形孝夫宮城学院女子大学名誉教授）、仙台国際センター、2013.10.24

５．梅屋潔「それでも「お年取り」の儀礼は行われた―気仙沼市鹿折地区浪板および小々汐の年越し行事にみる「祈り」」気仙沼市民公開講座2013「未曾有の災害に／気仙沼はどのように／向き合ってきたのか」主催：東北学院同窓会気仙沼支部・気仙沼市教育委員会・東北学院大学東北学院大学ボランティアステーション、東北学院大学同窓会気仙沼支部、共催：東北学院大学災害ボランティアステーション・東北学院大学地域共生推進機構・東北学院同窓会、後援：河北新報社・三陸新報社、於：旧・気仙沼河北ビル、2013.11.2

６．相澤卓郎「「遊び」としてのカツオ節業再建―水産加工のマイナー・サブシステンス論」金菱清編『千年災禍の海辺学―なぜそれでも人は海で暮らすのか』生活書院、134-152頁、2013年

７．金菱清編『千年災禍の海辺学―なぜそれでも人は海で暮らすのか』生活書院、134-152頁、2013年

８．金菱清著『震災メメントモリ―第二の津波に抗して』新曜社、2014年4月

９．高倉浩樹編『東日本大震災に伴う被災した民俗文化財調査―2012年度報告集』（宮城県地域文化遺産復興プロジェクト平成24 年度文化庁「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」）東北大学東北アジア研究センター、2013年（PDF形式。以下URLよりダウンロード可、）。

<https://gp.cneas.tohoku.ac.jp/fc4e703f30462ef38d216c614061494cf49f1a22d>

１０．高倉浩樹・滝澤克彦編『無形文化が被災するということ―東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』新泉社、2014年1月

１１．高倉浩樹ほか、東日本大震災で被災した宮城県沿岸部の無形民俗文化財データベース「みやしんぶん」（以下のURLより）2014年3月

<http://mukeidb.cneas.tohoku.ac.jp/>